

台湾情報から台湾認識へ

——江戸幕府の収集した台湾情報と人々の台湾認識——

田 中 梓都美

From Information on Taiwan to the Recognition of Taiwan
—Information on Taiwanese Gathered by the Tokugawa Shogunate
and the People's Awareness of Taiwan

TANAKA Azumi

In 1639, the Edo bakufu prohibited Portuguese ships from entering Japanese ports and also prohibited any Japanese from travelling overseas. After this, information in the form of written rumours entered Nagasaki. Naturally, much of this information concerned Taiwan; however, as of yet, there is no research that focuses upon the unique geography and customs of Taiwan. During the Edo period, the Japanese awareness of Taiwan was formed by Tei Seikō's [Zhèng Chénggōng 鄭成功] accounts; however, for this argument, it is necessary make a distinction between governmental awareness and popular awareness. This paper attempts to determine the accuracy of information in materials compiled by the Edo bakufu and how faithfully they represent the actual condition of Taiwan. This will then be contrasted with Chinese records. Also, a comparison and investigation of the information on Taiwan contained in Edo-period publications and the information on Taiwan in the materials compiled by the Edo bakufu will provide insights into the formation of the Edo-period populace's awareness of Taiwan.

キーワード：台湾、『華夷変態』、『通航一覧』、『華夷通商考』、『和漢三才図会』

はじめに

江戸時代のはじめ、海外との通商活動を活発に行っていた幕府が、寛永16（1639）年、ポルトガル船の来航を禁止し、全面的に日本人の海外渡航を禁止したのちも、四つの口に限定して貿易活動を継続していたことは近年広く知られている¹⁾。この四つの口（松前口、対馬口、長崎口、薩摩口）の中で、特に重要な任務を帯びていたのが長崎である。

1) 例えば鶴田啓「近世日本の四つの「口」」（紙屋敦之・木村直也編『海禁と鎖国』東京堂出版、2002年）。

薩摩の島津氏、対馬の宗氏、北海道の松前氏と違い、幕府の直轄地として機能していた長崎には、中国やオランダだけでなく、東アジア各地から「風説書」を通じて、様々な情報がもたらされた²⁾。

もちろん「台湾」に関しても、「排清復明」を唱えた鄭氏に関する情報や、鄭氏が行った交易活動に関する情報、また台湾で起こった反乱に関する情報などが日本に数多く伝来した。今日、これら鄭氏及び反乱情報を題材にした論稿は少なくない³⁾。だが、同情報中、同時に記された台湾の気候や原住民など、台湾固有の風土や民族に焦点をあてて論じられたものはない。

また、近世における日本人の台湾認識は「鄭成功」で述べられることが通説となっている⁴⁾。だが、最新の台湾情報を入手することの出来た幕府と、市井の人々が有した台湾認識を区別することなく、「近世における日本人の台湾認識＝鄭成功」と断定してしまってよいのだろうか。筆者は、支配者の知り得た台湾像と、人々が理解した台湾像を区分して論じるべきだと考える。

そこで本論では江戸時代、幕府が蒐集・編纂した『華夷変態』と『通航一覧』の中の「台湾」情報を用い、これらの情報の中に、①どれだけ当時の「台湾」の実情を記したものがあるかを調査するとともに、②それら情報が、どういった視点で収集されたか、また③情報がどれだけ正確なものなのかを、中国文献と対応させながら論じる。そして最後に、④これら速報として齎された台湾情報と、『華夷通商考』などの出版物にみる台湾情報を比較・検討することで、近世社会にどのような台湾認識が形成されたかを展望する。それは、明治維新後及び日本の「領台期」に構築される台湾認識への距離を測る作業へと通じているのである⁵⁾。

第1章、『華夷変態』・『通航一覧』にみる台湾情報

江戸時代を通じて、幕府は積極的に海外情報を収集・編纂したが、代表する二冊が『華夷変態』と『通航一覧』である。

『華夷変態』は、林鶯峰・鳳岡親子が幕府の命を受け、正保元（1644）年の明朝没落、清朝の入関定鼎の年から享保9（1724）年頃までに、長崎に来往した福州・漳州・泉州の商船が伝えた唐船風説書をまとめた書である。同書の記事は、唐通事が全ての入津唐船から海外情報を聴取、不正のないよう細心の注意を払い、監督して記された風説書を基にしているため、その情報の信頼度から、現在でも非常に高い評価を受けている一冊である⁶⁾。また、『通航一覧』は江戸幕府の命により、林復斎らが永禄9（1566）

2) 中村質「近世における日本・中国・東南アジア間の三角貿易とムスリム」（前掲『海禁と鎖国』、2002年）。

3) 浦廉一「華夷変態解題」（林春勝・林信篤編、浦廉一解説『華夷変態』東洋文庫、1958年）。

4) 例えば松永正義「台湾領有論の系譜－1874（明治7）年の台湾出兵を中心に－」（台湾近現代史研究会編『台湾近現代史研究 創刊号』龍溪書舎、1978年）。

5) 明治時代、日本は①1871年の牡丹社事件発生後と、②1895年の台湾領有後の二回、自身の台湾認識を大きく変化させる。このうち、後者の台湾認識を形成するきっかけを担った人物の一人が、筆者の研究主体である台湾総督府雇員・伊能嘉矩である。同論稿で江戸時代の台湾認識を明らかにすることは、伊能がその思想的根底に有したであろう、日本人の台湾認識を理解する上で必要な作業だと考える。

6) 一部、「阿蘭陀風説書」や薩摩藩・対馬藩から注進された内容も含まれる。また、延宝2（1674）年以前は顕著な事例に関してのみ調整・上達されたものであるが、それ以後は全ての入津唐船から聴取した。（前掲、浦廉一、1958）

～文政8（1825）年の資料を基に編纂した対外関係史料集で、国別・年代順に記されている点、また極めて客観的に史料が取り扱われている点から、こちらも非常に信頼出来る史料といわれている⁷⁾。

そこで本章では、上記二冊に見られる台湾情報を複数の項目に整理して取り上げ、中国側資料と照らし合わせながら検討する。両者の間の異同、異同が生じた理由、正確度の判断、特記すべき事柄などであるが、この作業は幕府中枢が把握したであろう台湾像を検討することになるだろう。

なお注意点として、『華夷変態』はその名の通り、明（＝華）清（＝夷）交代を主題に据えた書であるため、明清交代期に台湾で起こった戦乱に関する記事が他を圧倒している⁸⁾。だが、先述した様に、本論の主題は日本に伝来した「台湾」情報にあり、「台湾」を拠点に活躍した鄭氏一族にあるのではない。よって、本章ではその時期を除外し、鄭克塽が清朝に降った天和2（1683）年以降の風説書を考察対象とする。

1) 国名の変遷

『華夷変態』に記された台湾情報の中で、最初に考察したいのが国名の変遷である。国名の変遷に関し、貞享4（1687）年の30番台湾船⁹⁾は、「台湾与申嶋地は、元東寧与申たる所に而御座候、国姓森官、錦舎、秦舎、三代之内は、東寧与申候、台湾と申候者、古来与申伝候名に而、大清之領地に罷成、秦舎降参之後、元之台湾と申候」と、国名が鄭氏政権を挟んで「台湾→東寧→台湾」と変化したことを伝えている。

同様の情報は、同年の48番台湾船¹⁰⁾も伝えているが、同船は「錦舎居城之節は、東寧与申候（中略）大清Y元之名を用候」と、「東寧」という国名が森官（鄭成功）からではなく、錦舎（鄭經）から使用されたと述べている。実際には、鄭成功は寛文元（1661）年、台湾を「東都」と命名し、その子鄭經が寛文4（1664）年、国名を「東寧」と改めたため、どちらも完全に正確な情報とはいえない¹¹⁾。延宝2（1674）年の『通航一覧』では、台湾漂着日本人が「台湾」のことを「さきに台湾このころ東寧と唱ふ」と紹介している点¹²⁾、また、「台湾」が「東都」と呼ばれていた時代が3年と短かった点から、「東都」という名称はさほど浸透していなかったのだろう。

ただ、「東都」に関する情報以外、国名に関して極めて正確な情報が日本に伝わっていたことは確かで、これは貞享4（1687）年以降に来航した全ての台湾船が出航地を「台湾」と称している点からも裏

年)。

7) 木崎弘美「『通航一覧』の編纂と伝来に関する考察」（『海事史研究』47号、1991年）、同「『通航一覧』の書誌学的考察」（『海事史研究』49号、1992年）。

8) 例えば川勝守『日本近世と東アジア世界』（吉川弘文館、2000年）、中村質『近世対外交渉史論』（吉川弘文館、2000年）。

9) 『華夷変態』上冊、689頁。

10) 『華夷変態』上冊、704頁。

11) 「成功就台湾土城居之、改台湾為安平鎮、赤嵌為承天府、総名東都；設府曰承天府、設県曰天興県、萬年県。未幾、成功死。子經居鷺江（即今廈門）、成功弟世襲陰有竊拒意；經攻逐之、世襲渡海歸誠。經嗣立、改東都為東寧、改二県為二州。」（台湾文献叢刊65『台湾府志』巻1、封域志、沿革、4頁）。

12) 『通航一覧』巻215、唐国福建省台湾府部11、漂流、443頁。

づけられる。

2) 行政機構の変遷

次に行政機構の変遷に関して、貞享2（1685）年の1番福州船¹³⁾は、

去年没落之後は、韃靼人総兵之官楊氏之者、為鎮守と罷有候、此者之替りに、総兵之官兩人、壹人は馬氏、壹人は陳氏之者致鎮守も、東寧を一府二県に改め、府は台湾府と申候、此府官は蔣氏之者にて、惣鎮守に而御座候、二県之県官も、忒人に而御座候得共、其名を存不申候、鎮守之軍兵、忒萬程に而御座候、

と伝えている。風説書に記された「楊氏」は、清代台湾総兵の楊文魁¹⁴⁾を、「蔣氏」は貞享4（1687）年の30番台湾船¹⁵⁾が伝えている、清代台湾歴任知府の蔣毓英¹⁶⁾を指すと思われる。一方、「東寧を一府二県に改め、府は台湾府と申候」という情報は、元禄3（1690）年の43番台湾船¹⁷⁾が伝えた、「府之外に県三ヶ所に而、台湾県、鳳山県、朱羅県と申候、何れも則台湾府に属し居申候、守護之兵卒も三万程御座候」という、台湾府に「県三ヶ所」が置かれたという情報と一致しない。台湾に設置された府県に関しては、『台湾府志』の、「克塽心膽墮地、識天命之有歸、遂納款歸誠。於是廷議設府一：曰台湾；県三：附郭曰台湾、外曰鳳山、諸羅¹⁸⁾。」を始め、多くの史志で同様の記事を確認出来る。実際、鄭克塽が清に降るのが天和3（1683）年8月18日で、貞享元（1684）年4月14日には行政制度が一府三県と変更になっていること¹⁹⁾から、1番福州船は台湾行政制度に関する正確な情報を持たないまま、日本に來航したといえよう。

また、貞享2（1685）年12番福州船²⁰⁾から「秦舎所領之時は、府之名を承天府と申候得共、大清に属し申候よりは、府名を改、台湾府と申候。」との情報が伝わってきていることから、台湾府は承天府の名称を変更させただけの機構だったことがわかる。さらに元禄3（1690）年の43番台湾船²¹⁾が、「台湾之儀も、前廉は福建八府之外に而、漳州支配分に而御座候所に、只今は一府之地方に罷成、福建之属府に而御座候、府之名を則台湾府と申候」と述べるとともに、同年の56番台湾船²²⁾が、「福建之一省、元は八府に而御座候所に、只今此台湾一府に罷成、福建九府に而御座候」と伝えていることから、この時期、台

13) 『華夷変態』上冊、449頁。

14) 楊文魁は清代台湾総兵として、康熙23（1684）～康熙26（1687）年までその職に就いた。（許雪姬総策画『台湾歴史辞典付録』遠流出版、A140頁。台湾文献叢刊65『台湾府志』巻4、武備志、暦官、76頁）

15) 『華夷変態』上冊、689頁。

16) 蔣毓英は清代台湾歴任知府として、康熙23（1684）～康熙28（1689）年までその職に就いた。（前掲『台湾歴史辞典付録』A088）。

17) 『華夷変態』中冊、1218頁。

18) 台湾文献叢刊65『台湾府志』巻1、沿革、1頁。

19) 張之傑編『台湾全記録』錦繡出版、1900年、57頁。

20) 『華夷変態』上冊、467頁。

21) 『華夷変態』中冊、1218頁。

22) 『華夷変態』中冊、1233頁。

湾が福建省に編入されたことも確認できる。この事実は、元禄4（1691）年の52番台湾船²³⁾が、「私共之儀は、漳州之内台湾に而仕出し」と伝える以外、他の唐船は「福建」から出航したと述べている点、また中国文献からも明らかである²⁴⁾。

総じて、初期の行政制度の変遷に関しても、ほぼ正確な情報が伝来していたといえよう。言い換えれば、承天府が台湾府と名称を変え、さらにその下に三県が設置されたこと、台湾が福建省の配下になったことなど、「領台初期」の正確、かつ詳細な事柄を幕府は把握していたのである。

一方、領台初期を除いて、清朝の行政機構の変遷に関する情報が日本に入ってきたのは、台湾で発生した乱に関する情報（後述）を除くと、享保年間の二件のみである。

享保3（1718）年の22番台湾船²⁵⁾は、

台湾惣兵之官姚氏、当五月に広東惠州之提督に被致昇進、早速広東江被罷越候、右台湾之新惣兵、私共出帆之節迄は下向無御座候、且又去年西洋を被禁候以後、広東広西之惣督楊氏被経奏聞候は、東京広南此両所は、広東之内海江地続之所に而御座候、依之往来赦免之儀を、去年九月に被致奏達候段風聞仕得共、爾今勅許之沙汰無御座候

と伝えている。また、享保5（1720）年の台湾船²⁶⁾が、「且又台湾前之惣兵姚氏、去々年三月に広東之提督に被致昇進、其代り新惣兵歐陽氏在任に而御座候」と伝えているので、文中の「姚氏」と「歐陽」はそれぞれ姚堂²⁷⁾と歐陽凱²⁸⁾を指すと思われるが、三年に一度交代する清代台湾総兵の名を、上記二船が伝えたのはなぜだろうか。

この問いに関し、注目したいのは「且又去年西洋を被禁候以後」という記述である。実は22番台湾船が日本に来航した前年の享保2（1717）年は、康熙帝が南洋海禁令を出した年にあたる。南洋海禁令は日台間の貿易を直接脅かすものではなかったが、貿易に間接的に影響するのを恐れ、台湾船が情報を伝えたのではないだろうか²⁹⁾。いずれにしても、康熙帝の南洋海禁令により、享保3（1718）年に清代台湾総兵が交代したことを幕府は知るのである。

3) 台湾で発生した反乱

次に、清代台湾で発生した乱情報から判断出来る台湾の状況に関し、述べる。

清代の台湾では「三年小反、五年大反」という言葉が端的に示す様に、民衆の反乱が頻繁に起こった。その反乱の中でも『華夷変態』が編纂された年代に起こった劉却の乱と朱一貴の乱に関して、比較的詳しい情報が伝来している。

23) 『華夷変態』中冊、1354頁。

24) 例えば「康熙二十二年討平之、改置台湾府、属福建省、領県三。」（台湾方志68『清一統志台湾府』建置沿革、1頁）。

25) 『華夷変態』下冊、2803頁。

26) 『華夷変態』下冊、2868頁。

27) 姚堂、清代台湾総兵、1712～1718年3月24日（前掲『台湾歴史辞典付録』A140）。

28) 歐陽凱、清代台湾総兵、1718～1721年5・6月（前掲『台湾歴史辞典付録』A140）。

29) 柳澤明「康熙五六年の南洋海禁の背景－清朝における中国世界と非中国世界の問題に寄せて－」（『史観』140号、1999年3月）。

劉却の乱に関しては、元禄15（1702）年に来日した台湾船三艘がその経過を伝えており、特に37番台湾船に詳しい情報が見られる³⁰⁾。風説書には、

台湾奥山に、福建之劉却と申者数年住居仕罷在候、此者去冬十二月に企徒党、台湾を奪可申と仕候由及露頭候、依之台湾総兵之官Y兵卒を差出し、当四月に右之徒党之頭人劉却、其外餘類共迄、皆々召捕致誅伐候に付、今程は彼地静謐に罷成、諸人も安堵仕候

と、劉却の企てが元禄15年12月に「露頭」し、翌年の4月には「誅伐」されたことを伝えている。中国側の資料では、元禄16年2月に劉却が捕えられ、乱が完全に終息すると伝えられているので、その終結年次に誤差が見られるものの、乱の経緯などに関し、幕府は正確な情報を入手することが出来ていた³¹⁾。

一方、朱一貴の乱に関しては、清代台湾の三大反乱に数えられるほど大規模なものに発展したため³²⁾、劉却の乱とは比べ物にならないほど豊富な内容を風説書が伝えており³³⁾、当時の台湾社会の様子に触れる言説も見られる。

朱一貴の乱に関し、最初に詳細を伝えた享保6年の20番寧波船³⁴⁾は、「当四月廿七日之夜、福建之内台湾において、何者とも不知人、台湾地之野人其外人数百余人程催し、台湾南路營之地に打て出、彼地参将之官苗景龍と申人之官所に仕かけ申候」との記述より始まる。この情報は、当時、相互に密接な関わりを持つ「野人」と「華人」がいたことを知らせるとともに、「南路營之地」の「参将」が「苗景龍」だということも伝えている。「苗景龍」に関しては、『福建通志台湾府』の「南路營参将（駐鳳山県）」の項に、「苗景龍、五十八年任、有傳³⁵⁾。」とあるので、同情報は正確だといえるだろう。

また、風説書は続けて、「夫より直に同所安平鎮と申所之惣兵歐陽氏之官所江も、寄せ来る由相聞江候」と伝えており、この記述からは、享保3（1718）年に清代台湾総兵の任に就いた歐陽凱が、朱一貴の乱が発生した当時も同職に就いていたこと、同乱発生がすぐに「安平鎮」にまで伝えられたことが理解出来る。

さらに、同風説書は「引続き安平鎮之副将許氏兵を引連れ、進出て合戦いたし候處に、是も即時に敵被打取申候に付、台湾道爺之官梁氏は、船より厦門之地江逃行申候處に（中略）既五月朔日には台湾之地三県共に、悉く敵に被打取候（中略）安平鎮南路營北路營は、台湾要害之地に而御座候」と続く。「安平鎮之副将許氏」は、『台湾通志』より台湾水師副将の許雲³⁶⁾を、「台湾道爺之官梁氏」は、清代分巡台

30) 『華夷変態』下冊、2276頁。他に同年38番・45番・48番台湾船も劉却の乱に関し、情報を提供している。

31) 劉却の乱に関して記された風説書の内容に関しては、松浦章氏が詳細に検討されているので、本節を記すにあたり、特に参照した。（松浦章『海外情報からみる東アジア—唐船風説書の世界—』清文堂、2009年、231頁）。

32) 清国統治下の台湾三大反乱は他に、天明6（1786）年の林爽文の役、文久2（1862）年の戴潮春の役が挙げられる。

33) 朱一貴の乱に関しても、松浦章氏が風説書の内容と中国文献の記述を比較・検討している。同乱に関し、氏は「日本にもたらされた風説書の朱一貴叛乱情報は月日に若干の相違はあるものの、関係する清官軍側の武官等の人名はほとんど誤り無く伝えられていた」と述べるとともに、朱一貴等に対する清朝の処罰の状況もほぼ正確に伝えられたと結論づけた。（前掲松浦、2009年）。

34) 『華夷変態』下冊、2905頁。

35) 台湾方志84『福建通志台湾府』職官、巻120、南路營参将、690頁。

36) 「許雲、字復旦、海澄人。臺灣水師副將。朱一貴亂、南路陷寇、雲率兵五百、援總兵歐陽凱、於春牛埔迎賊。」（台湾方志130『台湾通志』列伝、忠義、許雲、578頁）。

湾厦門兵備道の梁文煊³⁷⁾を指す。また梁文煊が「厦門之地江逃行」たことから、当時、台湾で乱が発生した時は厦門に知らせる手順になっていたことが理解出来る。そして「台湾之地三県共」という記述から、この時期、台湾の行政区分は清朝領有初期と同様であったと判断出来³⁸⁾、最後の「安平鎮南路營北路營」という記録から、同所には安平鎮と南路營の他に、北路營も設置されていたことがわかる。

次に朱一貴の乱に関し、詳細な情報をもたらしたのは享保6年の23番台湾船³⁹⁾で、同船は朱一貴の乱発生後、清朝が勝利するまでの経過を端的に伝えている。この風説書の書き出し部分、「同廿一日に台湾之内統領營に仕懸け及合戦、参将之官周氏を打取⁴⁰⁾、同廿七日に者台湾之城下に打入」からは、20番寧波船が伝えた情報より前の「廿一日」に乱が発生していたことがわかる。また、27日後の経過に関し、「厦門水師之提督施氏方より、右之趣福州浙閩南之惣督覺羅滿保方江被相達候處（中略）台湾近所澎湖迄先差向被置、其後浙江福建広東、此三省之官兵数万騎を集め」と伝えていることから、台湾で不測の事態が発生した時、「台湾→厦門水師→福州浙閩南之惣督」と連絡され、すぐに呼応出来る体制が整っていたといえよう。

以上の二船より、朱一貴の乱に関する経過がほぼ正確な形で日本に伝えられたが、他に享保6年の24番南京船⁴¹⁾は「台湾に南路北路中路と申候而、三所御座候」と、台湾には南路北路だけでなく、中路も設置されていたことを伝えている。また、「兵船一同に台湾之内鹿耳門と申所へ乗入（中略）台湾城下より安平鎮は程近候」という記録からは、台湾と澎湖とをつなぐ、鹿耳門という港の名称とともに、台湾城下と安平鎮が近距離に位置することが伝わってきている。

そして、最後に享保7年の10番台湾船⁴²⁾が「尤台湾表去秋より平安に罷成、別而当年は静謐に御座候に付、去年より厦門に逗留被致候浙閩之惣督覺羅滿保事、当三月に福州江帰城被致候。」と台湾の平和を伝えて、同乱に関する記載は以後見られなくなる。

4) 台湾華人と産物

台湾華人に関しては、貞享5（1688）年の134番台湾船⁴³⁾に、「台湾之儀、前廉は殊之外繁昌仕、住居之唐人数万人有之候所に、大清一統已来、住居之唐人共年々に泉州漳州厦門などへ引取により、只今は唐人は漸数千人居申鉢に御座候、依夫砂糖并鹿皮なども十分一も無之候故」と、砂糖や鹿皮の供給量が激減する程、華人人口が減少していることを指摘している。ところが翌元禄2年の39番台湾船⁴⁴⁾は、「人

37) 梁文煊は享保3（1718）～享保7（1722）年2月3日まで清代分巡台湾厦門兵備道の職に就いた。（『台湾歴史辞典』A083。台湾方志130『台湾通志』職官、文職、分巡台廈道、348頁）。

38) 一府三県の行政制度は享保8（1723）年に初めて一府四県二庁に変更になった。（『台湾歴史辞典』A079）。

39) 『華夷変態』下冊、2908頁。

40) 文中の「周氏」は周應龍のことを指すと思われる。（「朱一貴倡亂、元率師同本標右營遊擊周應龍於南路岡山禦賊；奮勇扼擊、賊敗走。」（台湾方志121『統修台湾府志』巻11、武備、列伝、447頁））。

41) 『華夷変態』下冊、2911頁。

42) 『華夷変態』下冊、2936頁。

43) 『華夷変態』中冊、968頁。

44) 『華夷変態』中冊、1110頁。

民は只今とても四五萬住居仕罷在候」、翌年の43番・56番台湾船⁴⁵⁾は人民が「拾万人程」と、すでに住民が台湾に戻ってきている様子を伝えている。また、元禄5年の26番台湾船⁴⁶⁾は、「台湾之儀も、只今者連々内地より移り申候人民多御座候而、今程は別而繁昌之地に罷成申候」と、元禄6年の32番台湾船⁴⁷⁾に至っては、「近年に罷成、泉州、漳州之諸所より台湾住宅を望者大分に御座候而、連々引越申に付、今程は已然より所も致繁昌、住宅も心安御座候」と、台湾の著しい人口増加と繁栄の様子を伝えている。これら風説書は、鄭克塽の降伏後すぐ、清朝が10数万に及ぶ移住民を中国に強制的に引き揚げさせるとともに、一度帰国した者の台湾への再渡航を禁じたこと、しかし人口過剰に陥っていた東南沿海各省の住民の台湾への密航は増加する一途であったことを端的に伝えている⁴⁸⁾。

また、華人の人口変動に、砂糖と鹿皮の生産量が直接影響を受けたことも134番台湾船により伝えられたが、鹿皮に関しては、元禄7（1694）年31番台湾船⁴⁹⁾が、「鹿皮類、累年台湾土産に而、大分出申候得共、去年より奥山之野人共、鹿皮類少く出し申に付、皮類殊之外少分に御座候、依夫私共船にも例年は大分積渡り申候得共、今度は漸少斗積渡り申候、其外余に土産物無御座候」と、鹿皮は華人が原住民との交易により入手しており、華人が生産するものではないということが伝えられている。この風説書は『台海使槎録』⁵⁰⁾の「日本之人多用皮以為衣服、包裹及牆壁之飾、歲必需之；紅夷以來、即以鹿皮興販。有麕皮、有牯皮、有母皮、有麟皮、有末皮；麕皮大而重、鄭氏照勛給價；其下四種、俱按大小分價貴賤。一年所得、亦無定數。偽冊所云、捕鹿多則皮張多、捕鹿少則皮張少；蓋以鹿生山谷、採捕不能預計也⁵¹⁾。」という記述とも重なる。鹿皮はオランダ時代より始まる、原住民の重要な交易品だったという事実を伝えるものである⁵²⁾。

なお他の産物に関しては、元禄3（1690）年の43番台湾船⁵³⁾が、すわう（蘇芳）を土産物として紹介している以外は、全て砂糖・鹿皮・米を台湾の産物として紹介しており、同年の56番船⁵⁴⁾には、「大商売

45) 『華夷変態』中冊、1218頁、1233頁。

46) 『華夷変態』中冊、1435頁。

47) 『華夷変態』中冊、1535頁。

48) 伊藤潔『台湾』（中央公論社、1993年、41頁）、若林正文『台湾－変容し躊躇するアイデンティティ』ちくま新書、2001年、29頁）。

49) 『華夷変態』中冊、1639頁。

50) 『台海使槎録』は康熙60（1722）年頃、黄叔瓚により記された書で、「赤崁筆談」・「番俗六考」・「番俗雜記」よりなる。同書は内容が多岐に亘るとともに、台湾原住民に関しても豊富な情報を記していることから、清朝領有初期の台湾が理解出来る文献として、後の史志編纂者も多々参考にしている貴重な一冊である。（『台湾文献叢刊提要』台北台湾銀行經濟研究室、1977年）。

51) 台湾文献叢刊4『台海使槎録』巻8、番俗雜記、社餉、164頁。また、『海国聞見録』も「教習土番耕作、令學西洋文字、取鹿皮以通日本；役使勞瘁、番不聊生。」と、原住民が鹿皮を採取し、その鹿皮がオランダを通して日本に舶来していたことが記されている。（台湾文献叢刊26『海国聞見録』東南洋記、11頁。）。

52) 清代、鹿皮は「平埔諸社、至此燒埔入山、捕捉麕鹿、剝取鹿皮、煎角為膠・漬肉為脯及鹿茸筋舌等物、交付賸社、運赴郡中、霽以完餉。」と、原住民が政府に支払う税のひとつであった。（台湾文献叢刊4『台海使槎録』巻3、赤崁筆談、52頁）。

53) 『華夷変態』中冊、1218頁。

54) 『華夷変態』中冊、1233頁。

は無之所に御座候」と、その他目立った産物がないことを伝えている。台湾の産物に関しては、『重修台湾府志』に、「鹽（有煮法、有晒法；臺止用晒法）、糖（有黑砂糖・有白砂糖）、冰糖（用糖煮成、如堅冰）、油（有芝麻油・有草麻油）、藤（有大藤・有荊藤）、菁靛（可以作染）、菁子（産於臺者最佳）、苧、麻、薯榔（皮黑・肉紅・可以染皂）、鹿・獐麂等皮⁵⁵⁾。」との記録があるが、日本人が輸入品とした台湾の産物は砂糖及び鹿皮が主だったために、風説書には記されなかったのだろう⁵⁶⁾。

5) 台湾原住民とその居住地域

『華夷変態』には、台湾原住民に関する記事が極めて少ない。その理由として、明清交代期に幕府が必要とした情報はあくまで明清交代に係る戦乱の様子や、戦乱終結後の台湾の様子・産業等であり、明清交代に直接関わりのない原住民情報は必要ではなかったことが挙げられる。台湾漂流民や台湾漂着日本人が伝えた情報以外に、原住民に関して述べられた風説書は、貞享4（1687）年の30番台湾船⁵⁷⁾と、元禄5（1692）年の台湾船⁵⁸⁾の二件しか確認出来ない。

貞享4年の風説書は、「尤奥山に野人共種類多居申候得共、何之妨も仕不申、安全に而罷有、台湾之城江近き野人共は、古に不相替、鹿之皮を取出し替物に仕申事に御座候」と伝えている。この風説書よりまず注目したい点が原住民の呼称に関してである。清朝時代に記された史志類には、原住民は野蛮という意味を込めて「土番」・「番社」・「番衆」・「番婦」など、「番」という文字を使って記される⁵⁹⁾。一方、唐通事は原住民の名称を「野人」と訳しているが、この呼称の変化に、日本に古来より存在する異域・異人観念が含まれている可能性がある。同点は日本人の異民族に関する認識を理解する上で非常に重要な点だと思うので、別稿で改めて論じたい⁶⁰⁾。

さて、同風説書は、台湾原住民は「奥山」で生活している者と、「台湾之城江近き」ところで生活している者に分かれ、「奥山」の原住民はさらに「種類多居」ること、「台湾之城江近き」原住民は、「鹿之皮」をとることを生業にしていることも伝えている。また元禄5（1692）年の風説書には、「山中には鹿皮取出し申候野人共、先規与住居仕罷在、台湾と商売仕申事に御座候、唐人与往来之野人は、近き山中之野人に而御座候、奥山之野人は、台湾とも往来無御座候」とあり、ここでも原住民は「近き山中之野人」と「奥山之野人」に区別することが出来、「近き山中之野人」が「唐人与往来」があって「台湾と商売」しており、「奥山之野人」と住み分けがなされていることが伝えられている。

一方、元禄6年の台湾船三艘は、すべて漂流台湾原住民に関して伝えているが、その中でも情報をよ

55) 台湾方志66『重修台湾府志』巻7、土産、貨之属、252頁。

56) 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館、1964年）。岩生成一『新版朱印船貿易史の研究』（吉川弘文館、1985年）。

57) 『華夷変態』上冊、689頁。

58) 『華夷変態』中冊、1435頁。

59) 『台湾府志』番社風俗の項などを参照されたい。

60) 日本人の異域・異人観念に関して、例えば荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅳ地域と民族』（東京大学出版会、1992年）、村井章介「日本中世の境界と領域」（『歴史学の最前線』、東京大学出版会、2004年）。

り詳細に伝えているのが53番台湾船である⁶¹⁾。53番台湾船の風説書には、「扱又去年台湾之野人貳人風難に逢、飄着仕候」を救助し、台湾へ送り届けたことが記されている。だが、台湾に着いてから、彼ら原住民を実際の居住地に送り届けるのに県官達は苦勞する。

依夫県官与即刻淡水と申所、台湾城下与廿日路御座候、野人もより之口所江被申付、山中異類之野人方江も遣被仕、口通し申候者を呼集め被申候得共、最初は皆々口通不申候然所に淡水与十日路奥山之口通し申候者参申候に付、対談被申付候得ば、此通事能敷申候而、事之様子埒明、尤右十日路程有之候と申候奥山之野人に其紛無御座候、其所之名を蛤仔難と申所に而御座候、則日本人申伝候かばやんと申音語に而御座候

すなわち原住民と「口通し申候者」がなかなか見つからず、彼らが「蛤仔難（かばやん）」の原住民だと判明するまでに時間を要したからである。また、「蛤仔難」に関しては、「淡水よりかばやん迄は、皆々山越に而御座候、其上かばやん迄之間に、異類之野人共数種銘々構を仕、受持仕罷在候に付、唐人之通ひ曾而成不申候」と、華人とは交流のない原住民が暮らす地で、「かばやんと又奥は、高山峨々たる所に而、谷々に構仕異類之野人共、或は五百三百、多人数之所千人には過不申候と申伝候、其所迄は唐人共終に参申候儀無御座候」と、「蛤仔難」より奥は華人がまだ踏み入れたことのない土地であると述べる。

また「台湾方与は、右之淡水迄之手遣迄に御座候」で、淡水を境に華人の影響が及ばない地域だとされている。だが、『臺海使槎録』には、「臺灣為土番部族、在南紀之曲、當雲漢下流；東倚層巒、西迫巨浸；北至雞籠城、與福州對峙；南則河沙磯、小琉球近焉。⁶²⁾」とあり、『台湾府志』にも「臺灣府襟海枕山、山外皆海。東北則層巒疊嶂、西南則巨浸汪洋。北之雞籠城、與福省對峙；南而沙馬磯頭、則小琉球相近焉。諸番檣櫓之所通、四省藩屏之所寄；戍以重兵、擇人而治、內拱神京、外控屬國。⁶³⁾」とある。これらによって清朝の領有範囲は雞籠（基隆）までだったことがわかる。

雞籠（基隆）に関して、貞享元年の1番広南船⁶⁴⁾は、「東寧之地、鷄籠と申所之沖を罷渡申候」、同年の20番暹邏船⁶⁵⁾は「東寧之内、鷄籠と申所より」、また延宝9（1681）年の『通航一覽』⁶⁶⁾には、「東寧之上鷄籠と申所之近く迄乗り申候」と、貿易港としての側面が記されていることから、当時基隆が原住民居住区との境界であるだけでなく、貿易港として賑わっていたことがわかる。

以上のことから、鷄籠が清朝の台湾統治の最北端であり、鷄籠と淡水の周辺は原住民居住区と華人居住区の境界であったという、正確な情報が幕府に伝わっていたといえよう。

第2章、江戸時代の書物にみる台湾情報と人々の台湾認識

以上、1章では、『華夷変態』と『通航一覽』がもたらす海外情報の信頼度の高さと、それらにより幕

61) 『華夷変態』中冊、1559頁。他に32番・33番台湾船が漂流原住民に関し、言及している。

62) 台湾文献叢刊4『臺海使槎録』巻1、赤崁筆談、3頁。

63) 台湾文献叢刊65『台湾府志』巻1、封域志、形勝、7頁。

64) 『華夷変態』上冊、414頁。

65) 『華夷変態』上冊、437頁。

66) 『通航一覽』巻215、唐国福建省台湾府部11、漂着、440頁。

府中枢が確認しえたであろう当時の台湾の様子に関して述べた。では江戸の市井の人々にとって、台湾はどのように認識されていたのだろうか。

江戸時代、日本人の記した書で、台湾に関する記述の見られる文献中、筆者が確認することの出来た書物は『華夷通商考』・『和漢三才図会』・『西洋紀聞』・『寛永小説』・『長崎夜話草』・『白石遺文』・『紅毛雑話』・『翁草』・『万国新話』・『善庵随筆』・『翁草』・『野史』・『続昆陽漫録』・『海外異伝』・『幽囚録』・『台湾鄭氏紀事』・『国性爺合戦』や『台湾軍談』、『明清闘記』等である。だが、これら書中、『国性爺合戦』に代表される軍記物は、鄭成功や朱一貴に関する事柄を脚色し、一篇にまとめたもので、当時の台湾情報を直接的に伝えたものとはいえない。そこで、筆者は『国書総目録』で「外国地誌」や「史論」に分類される、物語的要素を含まない書のみを考察対象に加えるのが適当と判断する⁶⁷⁾。

本章では、『華夷通商考』・『和漢三才図会』・『長崎夜話草』・『紅毛雑話』・『万国新話』・『西洋紀聞』の6冊を使用し、「江戸時代の人々が記した台湾＝江戸時代の人々の台湾認識」が『華夷変態』や『通航一覽』に記載された情報と重なるのかどうか、またこれら書は何を根拠に記されているのか、という問いに迫る。

1) 『華夷通商考』⁶⁸⁾

『華夷通商考』は元禄8（1695）年に刊行された西川如見⁶⁹⁾による書で、著者が長崎で見聞した支那、南洋、西洋の事情を、主に通商の関係から叙述したものである。同書は民間で台湾のことを記した最初の書であるだけでなく、台湾関連記事が極めて豊富である。如見は同書中、台湾の歴史を

此島古は主無き所なりしに、何の時よりか阿蘭陀人日本渡海の便りに此島を押領して城郭を構へ、住して日本其外の国々へ此所より渡海せしを、日本寛文の比、国性爺厦門ヨリ此島を攻落し、ヲランダ人を追拂ひ、國中を治め、城廓を改め築て居住せり。其子錦舎も父の遺跡を続、一国を治て明朝の代を再興せん事を謀て終に清朝に従はざりし。其子奏舎、日本貞享元年に至て清朝に降参して国を退き渡して、其身は王号を蒙り北京に住居す。今此島清朝より守護を置いて仕配す。

と、通史的な側面を持って記しているが、彼が用いた言葉に注意して読むと、鄭氏寄りに記されていることがわかる。例えば、台湾は元々「主無き所」だったが、「阿蘭陀人」が「此島を押領」するも、「国性爺」が「ヲランダ人を追払ひ、國中を治め」たと、オランダの台湾での行為を否定的に記し、逆に鄭成功の行為を評価する。

また、如見は台湾の名称に関し、「大宛 或台湾 又二名あり 東寧 塔伽沙谷」の四種類あることを

67) 『寛永小説』は『華夷変態』を編纂した林鳳岡が著しており、『国書総目録』に同書の分類が記されていないことから、考察対象に含むか迷ったが、その内容は物語的要素を多分に含むことから、本論の考察対象より外した。

68) 西川如見著、西川忠幸・飯島忠夫校閲『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』（岩波書店、1988年）。

69) 西川如見は江戸時代前期の天文家、地理学者で、慶安元年（1648）年、長崎に生まれた。20歳代に学問に志し、隠居してからは著述に専心、名声が知れ渡った。西洋の知識が極めて限られた江戸時代にあって、長崎という地の利を持つ如見の見識は高く評価され、享保4（1719）年には徳川吉宗に江戸に招かれている。享保9（1724）年没。著書は多数あるが、中でも天文・暦学・地理関係の著書は西洋認識の先駆けとして位置づけられている。（『国史大辞典』10巻、吉川弘文館、850頁）。

確認した上で、「此島根本の名は塔伽沙谷也。日本の人高砂の文字を仮用ゆ。或は大宛台湾共に唐人名けたる也。国性爺以後は国号を東寧と改む。此国中華の南方なるに東寧と号する事、国性爺生国は日本なる故に、生国を慕の意にやと云。」と述べている。

この記述からは、一章で確認した様に、台湾の国名を「東寧」と改めたのが鄭成功であるとの誤釈が通説になっていたことが理解出来る。それと同時に、如見が「大宛・台湾」という「唐人」がつけた名称とともに、「日本の人」がつけた「塔伽沙谷・高砂」という名称も台湾の「根本の名」と理解していたことがわかる。だが、この名称は、豊臣秀吉が高山国招諭を計画して以来、日本で一般的に使われていたとされているので、如見を含む当時の人々が一般に持っていた概念だと考えられる⁷⁰⁾。

さらに注意したい点が、「国性爺以後は国号を東寧と改」めた理由を、「生国の慕の意にやと云」としている点である。幕府編纂の書物には見られない、国性爺と日本の結びつきを述べた文の語尾を「云」で締めくくっていることから、この言説も如見独自のものではなく、当時の人々の、少なくとも長崎の人々が共通して持っていた認識だったと考えられる。如見が鄭成功を「国性爺」と俗称を用いて記した点も、おそらく人々の間では鄭成功という名前より、国性爺という呼び名の方が浸透していたからだろう。

次に台湾の位置と国土に関しては、「道規日本より海上六百四十里。厦門より七十里東南なり。或は百里の所もあり。此島の北の頭を圭籠と云。此所より南方の端迄百二十余里に亘れる島也。北極地を出る事二十三度より二十度に及べり。」と、地図上の位置を確認すると同時に、「北の頭を圭籠」とし、それより北の大地が「台湾」に含まれないことを明記しているため、この記述は『華夷変態』と重なる。また、気候と産物に関しては、「四季温暖也。日本の六七月此国大熱也。二八月の比は日本の四五月の如し。此国の冬は日本の八九月の比に同じ。雪霜降ことなく、一年に二度宛田作する国なり。」と、気候の特徴を詳しく述べるとともに、産物である米を紹介している。『華夷変態』には季節に関する記述がないため、同書の記録は如見が長崎で得た風聞か、中国文献による知識だと考える。

最後に原住民に関しては

人物甚卑しく、常に裸にて、獵を専として矛を持て鹿を追ひ、其肉を生にて食し、其皮を売て酒食を買。或は木綿に交易して木綿を多く積貯るを以て富りとす。常に其友と奔趨する事を習ひて、其疾速なる事麋鹿に勝れり。山中而已に居る故に山童と号す。海辺の漁人は猶以て賤き也。尤詞も曾て通ぜず。根本は文字も之れ無国なり。

と、こちらも『華夷変態』と『通航一覧』とは基本的に異なる内容が記されている。例えば『華夷通商考』でも『華夷変態』に記された交易としての鹿を紹介するが、それ以外に嗜好品としての酒、産業としての木綿に関しても言及している。また、原住民を「甚卑しい」人物だと位置づけた上で、「山中而已に居る山童」と「海辺の漁人」に区分しているが、この「甚卑しい」という表現も、「山童」と「漁人」という区分も、『華夷変態』と『通航一覧』では見られない。

70) 横田きよ子「日本における「台湾」の呼称の変遷について－主に近世を対象として－」（『海港都市研究』4号、2009年3月）。

2) 『和漢三才図会』⁷¹⁾

『華夷通商考』が出版されてから17年後の正徳2（1712）年に完成した書が寺島良安⁷²⁾の『和漢三才図会』である。『和漢三才図会』は明の王圻が著した『三才図会』を基に、対外情報と異人図を体系的に記した日本初の図説百科事典であるが、『三才図会』には台湾に関する項が設けられていない為、『和漢三才図会』に見られる台湾関連記事は寺島が記したものだといえる⁷³⁾。

まず、台湾の歴史に関して、同書は

往古無本主中古阿蘭陀人刼篡之構へ城郭ヲ以為日本通路ノ旅館焉於是有国姓爺ト云者父ハ則唐人寓居日本長崎ニ主子ヲ国姓爺是也住居厦門ニ福建之思明州也。寛文ノ初攻彼ノ島ヲ追阿蘭陀人ヲ自立為主ト改建テ城郭ヲ改塔曷沙古為東寧ト既而国姓爺死ス。子ヲ名ク錦舎ト。欲攻滅大清ヲ而不従ハ清朝ニ至テ子ノ奏舎カ之代ニ戦負降テリ清ニ退出ス。清ノ皇帝賜テ王号ヲ従ル干北京当貞享元年如今ノ大清置テ布政司ヲ治ム島ヲ也。

と、台湾は「往古無本主」だったが、「阿蘭陀人刼篡」し、その後「国姓爺」が「追阿蘭陀人」で「為主」となると、『華夷通商考』と同様の評価を下している。また、「国姓爺」は「日本長崎」の出であると、日本と国姓爺との関係を明記した上で、国姓爺が国名を「塔曷沙古」から「東寧」に変更したと、『華夷通商考』と同様の考えを記す。良安のこの考えは、別に国名を「大宛・台湾・東寧・塔曷沙古・和用高砂ノ字」と、四つの国名を併記している点からも明らかで、良安自身、当時の人々と同じ認識を有していたといえよう。

次に台湾の位置と国土に関しては『華夷通商考』の記述と目立った差異はないが、台湾の産物に関しては「白砂糖・鹿皮・山馬ノ皮・獐皮・木綿・西瓜」と、より多くのものに言及している。これは如見と違う中国文献を参考にしたためと考えられる。

最後に、原住民に関しては、「其人品卑賤ニテ常ニ裸形身甚タ輕捷加飛以漁獵為業毎食鹿ノ生肉ヲ而以鹿皮交易ス也。」と述べ、「以漁獵為業」と原住民を区別しない他は『華夷通商考』の記述内容と重なる。

3) 『長崎夜話草』⁷⁴⁾

『長崎夜話草』は、『華夷通商考』を記した西川如見が長崎で見聞した外国の事情を著し、西川正休が編纂、享保5（1720）年に発行された書である。

71) 寺島良安編『和漢三才図会』（東京美術、1970年）。

72) 寺島良安に関しては、元禄から享保期にかけて京坂を中心に活躍した医師という以外、残念ながら詳しい経歴はわかっていない。（樋口秀雄「『寺島良安』と『和漢三才図会』」（『和漢三才図会』東京美術、1990年）、『国史大辞典』14巻、吉川弘文館、871頁）。

73) 横田きよ子氏は、『三才図会』中に記された「小琉球」が台湾に相当すると述べる（横田前掲、2009年）。また、『三才図会』巻四の地図では、台湾島を「澎湖嶼」と明記しており、「台湾」と記された箇所が全く見られないことから、王圻は当時、台湾島＝「台湾」という概念を持ち合わせていなかったといえる。尚、『和漢三才図会』に関しては、位田絵美「『和漢三才図会』にみる対外認識－中国の『三才図会』から日本の『和漢三才図会』へ」（『歴史評論』592号、1999年8月）に詳しい。

74) 西川如見著、飯島忠夫・西川忠幸校訂『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』（岩波書店、1942年）。

同書中、如見は「塔伽沙谷之事件国姓爺物語」と題した条⁷⁵⁾で

塔伽沙谷は唐土東南の海中に在島国にて、本は国主もなく、農民は甘蔗を多く種て砂糖を造り、山中の民は山童とて猿の如くなるものなるが、明暮銚を持て麋鹿をつきとりて其肉を食とし、其皮を市に持出、酒食にかへて妻子を養ふをもつて産業とす。又女人は能木綿を織て、家毎に二百端三百端を常に貯へ積置るを分限とす。煖国にて寒気なき国なるゆへ、一年兩度の耕作にて米多き国なり。と、最初に台湾を「塔伽沙谷」と表した上で、「農民（華人）」と「山中の民・山童（原住民）」に関して説明する。華人に関しては、甘薯を作ると『華夷変態』と同じ内容を記している一方、原住民に関しては『華夷通商考』の様に原住民を区別して記してはいないものの、交易品としての鹿皮、嗜好品としての酒、業としての木綿を同様に紹介している。また、同項の後半部分に

いつの頃よりか紅毛人住居して、平戸へ渡海の便りとす、則名を台湾と改め、城郭を築て住居せり。しかるに寛文元年辛丑の年、国姓爺、福州・泉州の軍、援兵なふして利を失ひ、台湾に責入、紅毛を追落し、城郭を押取て住居とす（中略）又台湾の名をあらため東寧と称せしも、日本を忘れず故郷を祝きし意とかや。国姓爺智謀無双の軍将たりし事、長崎人の明清闘記に委し。

と台湾の歴史に関して記しているが、同文中に、『華夷通商考』とは決定的に異なる記述が見られる。それが台湾の国名に関するもので、如見は紅毛人が「塔伽沙谷」という国名を「台湾」に変更したと記しているが、同記述は、如見が同書中、浜田弥兵衛事件に触れている点から、『華夷通商考』を記して以降、オランダ文献に目を通した可能性を示唆している⁷⁶⁾。だが、全体的に見ると、東寧へと国名を改めた理由を「日本を忘れず故郷を祝きし意とかや」と述べ、「明清闘記」という、近松門左衛門が『国性爺合戦』を記す上で参考にした通俗物を、参考するに値する書と明記している点から、当時、台湾に関する人々の理解は、鄭成功を主題に据えた通俗物に由来するが多かったと考えられる。

4) 『西洋紀聞』⁷⁷⁾

新井白石が台湾に言及した記述は数少ないが、これら限られた記述から、白石は今まで紹介したいずれの書物とも違い、台湾の歴史を客観的に記していることがわかる。

新井白石が正徳5（1715）年に完成させたといわれる『西洋紀聞』の中で、白石は台湾を「此国の北は、すなはちフルモーザなり。タカサゴの事也。即今の台湾。もとヲ、ランド人の拠りし所、今はチャイナに属すといふ」と紹介している。同記述には、白石が「此国の北」が「フルモーザ」であり、「タカサゴ」であると、他の書とは違った説を唱えているものの、オランダや中国に対する否定的な記述がな

75) 如見は同書中、「紅毛舟初来之事」の項でも台湾のことにに関して触れているが、「塔伽沙谷之事件国姓爺物語」の項で特に詳しく台湾のことに関し、記しているため、今回は後者のみを考察対象とした。

76) 浜田弥兵衛事件は台湾事件とも呼ばれ、長崎代官末次平蔵の朱印船船長であった浜田弥兵衛が寛永2（1625）年、台湾南部の安平に渡航した際、関税の納入を拒否してオランダ人に貿易を禁止され、やむなく同地に越冬したことに端を発する日蘭両国人の紛争である。この事件は將軍の発給した渡海朱印状の侵犯事件として重視され、結果的に幕府に朱印船の渡航を中止させることになった。（『国史大辞典』11巻、吉川弘文館、667頁）。

77) 新井白石原著、大岡勝義・飯盛宏訳『西洋紀聞』（教育社、1980年）。

いことから、自身が入手した情報に脚色をつけず、そのまま紹介したと考えられる⁷⁸⁾。

5) 『紅毛雑話』⁷⁹⁾ と『万国新話』⁸⁰⁾

最後に、『紅毛雑話』と『万国新話』に関して述べる。上記二冊は蘭学者である森島中良⁸¹⁾ がそれぞれ天明7（1787）年と寛政元（1789）年に完成させた書で、『万国新話』に「人物風土は紅毛雑話中、海路の條に記したればはぶきぬ」と、両書が対になることを明記していることから、二冊同時に考察することにする。

まず、歴史に関し、中良は、「曆数一千六百六十一歳日本の寛文二年清の康熙元年に当つて、其島を支那の海賊に襲取られたりといふ。是国姓爺成功の事なり夫より後、紅毛より長を置事なし。」とオランダを中心に述べた上で、鄭成功を「海賊」と否定的に記している。また、国名も

「ホルモウザ」と云。華人は呼んで台湾といひ、又東寧ともいふ（中略）是より以往、紅毛人こゝを領して居城を構ふ。其所の名を「ゼイランテヤ」と云り。

と、「ホルモウザ」と「ゼイランテヤ」という、オランダ人のつけた名称で紹介する。そして台湾の産物に関しては「産する所の鳥は、鴉、鷺、鴻雁の属、獣は豹、鹿、麋の類、菓種は、椰子、檳榔、荔枝等のものを出す」と、今までで一番豊富な情報を提示しているのである。さらに

俗皆頑愚にして、人を殺す事を好む。頭の髪を禿にし、銅あるひは錫等の箔を粘。男女何れも跣足にして、身に短衫を穿、幅巾をもつて腰の下を蔽ふ。婦人は青き布を用て、脛を裹み、多く草花を帯。男子およそ十五歳なれば、藤を編て腰を囲み、其腰骨を小さくす。この故に、狩に出て獣を追ふ事、奔馬よりも速なり。生麋を以て齒を染め、耳を穿つて穴あり。身を刺て文にするものあり。皆紅毛の文字なり

と原住民の習性、衣服、生業、文字など、先に紹介した書物と違う詳細な内容を記している。オランダ文献を基にすることで、台湾情報が刷新された可能性が高いことを示唆している。

また、『万国新話』には、台湾の歴史と原住民の葬式の仕方に関してのみ記載がある。「喪居者歌舞す台湾」と題された項中、歴史に関しては

往昔台湾は主もなき罵なりしを、何の頃にや、紅毛人東南の諸国へ船を出すに便より地なく故、押領して城郭を構へ、嶋の名をも「ホルモーサ」と称しける。然るに寛文年間、国姓爺厦門より此罵

78) 天保12（1841）年に立原翠軒によって発行された『白石遺文』の「題靖台実録」の項を読むと、高子新との話題が『清台実録』に及ぶや、白石が、朱一貴は明帝の遺乱だが、英雄ではなく、民衆に希望を与えるものではないと述べていたことがわかる。同項からも、白石が当時軍記物の主人公になっていた朱一貴に関する言説に惑わされることなく、朱一貴にまつわる事柄を的確に見抜いていたといえるだろう。（新井白石著、今泉定介編輯・校訂『新井白石全集』（東京、吉川半七、1906年））。

79) 森島中良『紅毛雑話』（自家版、1787年）。

80) 森島中良『万国新話』（大阪、浅野弥兵衛、1800年）。

81) 森島中良は宝暦6（1756）年に生まれ、文化7年（1810）年に没した。兄は桂川甫周である。中良は家業の医術に携わる一方、江戸蘭学者の一員として、江戸蘭学の第二世代として蘭学の啓蒙に大きな役割を果たすとともに、戯作者としても有名であった。よって、彼の出版物は多方面・他分野・多ジャンルに及んでいる。（石上敏「森島中良の著作における江戸と上方―出版システムの問題を中心に―（『地域と社会』創刊号、1999年2月）。

へ押渡り、紅毛人を追払ひて、おのれが居城となし、地名をも東寧と改けるは、あまねく人の知所なり。

と、『紅毛雑話』同様、国名が「ホルモーサ」から「東寧」に変更になったと指摘するとともに、この事実が「あまねく人の知所なり」と記していることから、江戸の人々に、「ホルモーサ」という台湾の名称も浸透していたことがわかる。

さらに、『万国新話』は「浜田兄弟智勇の話」と題して、浜田弥兵衛事件に関しても触れているが、同事件もオランダと日本の間に発生した事件であるゆえ、この記述からも中良がオランダ文献を基に同書を記したと考えてよいだろう。

おわりに

以上、本論では江戸時代に幕府が収拾・編纂した台湾情報が、台湾の現状をいかに正確に伝えるものであったのかということと、これら情報が数冊の書を通じて、如何に近世の人々に伝達され、人々の台湾認識を形成するきっかけになったのかに関し、論じてきた。

1章では、江戸時代、主に「国名の変遷」・「行政機構の変遷」・「台湾で発生した反乱」・「台湾華人と産物」・「台湾原住民とその居住地域」に関する台湾情報が幕府に伝来していたことを確認したが、これら情報は、一部の年号や国名などの違いを除けば、ほぼ実情を伝えるものだった。

一方、2章に挙げた6冊に見られる台湾情報を詳細に検討すると、その内容から、朱印船貿易時代に得た台湾情報を記したものや、『国性爺合戦』等の通俗物から影響を受けた記述、中国文献やオランダ文献の影響を受けた記述など、その情報源は多岐にわたることがわかった。また、同6冊はその記述内容から、「①オランダに対して否定的に記したもの」・「②中国に対して否定的に記したもの」・「③中立の立場で記したもの」の3つに分けられることも判明した。井上厚史氏の、「同時代人によって「見たいように見られた」イメージの集合体が自己像や他者像なのであり、同時代人の欲望が写し取られた表象なのである⁸²⁾。」という指摘を借りれば、事実を求めた幕府と、自分の欲しい情報を手に入れようとした人々の間には、「台湾」の記し方に自然と差が出たのだろう。

結論として、江戸時代の台湾認識には2つの系統があったといえる。ひとつは『華夷変態』や『通航一覧』から得られた情報で、統治する清朝の文献と比べても遜色ないほどの正確さを備えたものであった。いまひとつは、『華夷通商考』などの江戸や長崎の知識人になる台湾認識で、幕府の得た台湾情報とは位相の異なるものであった。正確さにおいては劣る点もあったが、蘭学者のものには、オランダ文献にもとづく情報が入るなど、前者の認識を刷新する部分もあった。こうした位相の異なった二系統の台湾情報と台湾認識がつぎに大きな転換を遂げるのは、明治4年(1871年)の牡丹社事件以後である。この後、近代国家日本として統一した台湾認識が形成される過程が始まる。

82) 井上厚史「『国性爺合戦』から『漢国無体 此奴和日本』へ—江戸時代における華夷観の変容—」(『同志社国文学』58号、59頁、2003年3月)。